

【史料紹介】

木曽上松町における注目されていない
観光資源の観光ブランドの確立

楯 英雄

(1) 上松町から見る木曽駒ヶ岳の山々

1 観光面ではブランド化されていない木曽駒ヶ岳山系

「絶景」はその自然が最も美しく見える場所を指す言葉として使われている。木曽山脈、いわゆる中央アルプスは、東の伊那谷、西の木曽谷が沈下し、中央部が隆起した地壘山地である。

伊那谷、木曽谷からの中央アルプスの最高の「絶景」は、上松町から見た木曽駒ヶ岳の山々で、宝剣岳、三ノ沢岳、木曽前岳、牙岩(2676)、麦草岳、風越山、赤林山の山々である。

17世紀後半、木曽路を歩いた本草学者貝原益軒は、「上松の民家八十ばかり、此辺の景ことにすぐれたり」と木曽駒ヶ岳の山の風景をかいている。

江戸時代中期尾張藩の有識者が制定した「木曽八景」の一つ「駒嶽の夕照」は、上松町から見た風景である。

札幌農学校でクラーク先生の教えを受けた地理学者志賀重昂が、明治28年に出した『日本風景論』の第一刷の表紙は、三ノ沢岳、木曽前岳、牙岩あたりの山々が抽象化されたものである。

『日本風景論』は、福沢諭吉の『学問ノススメ』に次ぐ明治時代のベストセラーで15刷の版を重ねて発行されている。この第一刷の上松町から見た駒ヶ岳の表紙が、その後日本画家の巨匠川合玉堂の目にとまり、川合玉堂は名作『駒ヶ岳』を描いている。

この駒ヶ岳は、滑川溪谷から見た三ノ沢岳の風景で、山麓は敬神の滝あたりの風景を組み合わせ描いている。

2 上松町以外では山の名が知られていない三ノ沢岳

三ノ沢岳(2847)についてアルピニスト吉沢一郎は「雪のある時上松から見た三ノ沢岳は実に堂々たるものであった。木曽山脈の中では、おそらく三ノ沢岳が一番どっしりした山容を持っているのではないかと思う。」と書いている。(信州山岳百科Ⅱ)。

三ノ沢岳の東側には、木曽山脈の山では千畳敷カールと共に大きなお椀の底のような形をした氷河によって作られたカール地形が、標高2600Mから2800Mにかけて見られるという。このカールは約1万年以上前の氷河期に数十から数百Mもの厚さの氷を抱いていたに違いないと『長野日報』(平成2年4月21日)記者の松岡隆氏は書いている。

三ノ沢岳は、「信州美しき百山」に選定されている。

3 木曽前岳の大崩壊地の絶景

山の美しさ、いわゆる山容は、富士山や木曽御岳山、浅間山のようなコニーデ型の均整の取れた山が日本的な山の名山の異景である。一方槍ヶ岳などの荒々しい地形の山々も山岳美の一

例である。

上松町からみる木曽前岳（2826M）や、牙岩（2676M）は後者の例で、有史以来幾度となく、山岳崩壊を繰り返し、花崗岩の巨石を北股沢へ落下させてきた。この数年来建設省（国土交通省）関係者は、「深層崩壊」という新しい造語で山の大崩落のメカニズムを伝えている。

木曽前岳は太古以来深層崩壊を繰り返し、下流の北股沢、滑川に直径3Mを越えるおびただしい花崗岩の巨石が河原一面に散乱している。

木曽前岳直下の北股沢に10年の歳月をかけて昭和63年、高さ20M、長さ300Mの東洋一という滑川第一砂防堰堤が完成。その6カ月後の平成元年、麦草岳の南側が大崩壊。20万立方Mという途方もない大土石流で滑川第一砂防堰堤が埋まってしまった。次のように冷笑された。

ひと晩で埋まってしまった大堰堤
地元では埋まった滑川堰堤笑われて

滑川第一砂防堰堤は上流の土砂を食いとめ下流の崩壊を防ぐ役割を持つ。滑川砂防堰堤で土石流を止めたことによって下流のJR東海の中央西線や国道19号線の鉄橋や橋の流出がまぬがれたことを知り、改めて滑川第一砂防堰堤の評価が高まった。

木曽前岳の山頂部に牙岩（きばいわ）、と呼ばれる大きな岩がある。高さは30M、50Mともいわれているが定かではない。牙岩の周辺部は崩壊が進み、いつの日かこの牙岩も北股沢へ落下すると言われている。

上松町の観光パンフレットには、この「牙岩」の説明はされていないが、高さ、牙岩の標高（2676M）。木曽前岳の標高の三角点の位置などを説明することによって、観光客の方々に興味を持っていただくことが出来る。

『信州山岳百科Ⅱ』で私は、山岳雑誌『岳人』（296号）の記録を紹介しておいたが、厳冬期に昭和22年から43年まで9回の登はんがされている。地元上松町のアルピニスト武居生氏も登はんされたことを生前の氏からお聞きしたことがある。

木曽前岳の荒々しい男性的な山壁（やまひだ）と、頂上に鋭く天を突く牙岩は見る人々に感動をあたえる。この前岳の北股沢の花崗岩の崩壊した巨岩や牙岩に魅せられた写真家が牧野清助氏で、会社を定年後滑川近くにある御自宅から幾度も北股沢へ撮影に入られている。

平成14年6月7日、北股沢で撮影中浮石の下になり亡くなられた。牧野さんの撮影された牙岩は天を鋭く突き上げ崇高な姿で、私は「木曽のオベリクス」を連想する。それは「祈りの塔」である。

上松町を訪ずれるたびに私はこのオベリクスに向かって手を合わせ祈る。そして牧野さんを思い出し、牧野さんのご冥福を祈る。

4 雪形の出る麦草岳

麦草岳（2733）は上松町から見える木曽駒ヶ岳の山々で「蛇頭」（じゃがしら）の雪形の出る山である。この雪形は上松町全域、大桑村、旧三岳村三尾から見る事ができる大きな雪形で、稲の初蒔きの農事暦となっている。

雪形は地元に関心な方々がおりに雪形研究会を作り新しい雪形を発見している。大町市の詩人金田國武氏は、雪形の詩を多く発表しているが、この詩人にちなんで「雪形祭」が近年始まった。

木曾駒ヶ岳も木曾谷から広く見られる山で、新しい雪形はまだまだ埋もれているものと思われる。木曾の行政、観光協会が観光客に雪形発見の旅を呼びかけることも木曾山脈を深く知っていただくことの一つである。

また、地元の小、中、高校生にも呼びかけ新しい雪形さがしは、ふるさと木曾山脈の新しい発見である。このことはとりもなおさず、木曾山脈、木曾駒ヶ岳の山々のブランド化である。

麦草岳の山頂部は広く平坦部が広がっている。ここに這松（ハイマツ）が密生し、青々とした山の姿を見せている。この青い山頂部が「麦草」（ムギクサ）という山の名のルーツとなったものである。

この麦草と呼ぶのは上松町だけで、木曾町福島では「駒石」と呼んでいると武居生氏は話されている。「駒石」について『吉蘇志略』（きそしりゃく）は、「駒嶽是れ木曾の東嶽なり、数峰連続し、その一峰の頂に石有り、形馬のごとし、故に駒嶽の名あり」と駒ヶ岳の山の名は駒石からおこると説明している。

5 上松町から見た駒ヶ岳のブランド化

平成23年現在上松町役場が発行している観光パンフレットの17、18ページの見開き2ページに上松町野尻の部落から望む、木曾前岳、麦草岳が大きく紹介されている。やや小さい写真に、三ノ沢岳、風越山。その南に大きな山が撮っている。

この風越山の南側の山について上松生れの私ですら山の名は知らない。また「駒ヶ岳夕照」の説明がついて、夕日に映える、麦草岳、木曾前岳、牙岩、駒ヶ岳山頂、中岳、宝剣岳、三ノ沢岳が小さな枠の中に納まっている。

16ページには、「木曾八景 駒の夕照」と説明がつけられ、三ノ沢岳の南の独標（2339）、蕎麦粒岳（推定2330）、キニバ岩（2120）の三山が入り、白い雪を赤く染める夕日の連山が撮っている。

19ページ、20ページは上松町の木曾駒ヶ岳山系の山々の登山コース。山の名と標高。里山、上松町の部落などが入る地形図ともいえる美しい地図である。この出来ばえは専門業者でなければ作成できない地図である。

さて、16ページから18ページまでの木曾駒ヶ岳の写真に、山の名、標高が記入されていない。いわゆる上松町の観光パンフレットの作成の課の職員や上松町出身の私などは山の名はわかるが、よそから上松町を訪ずれた観光客にはわからない。

山の名前と、山の標高を入れるのは平成10年代の観光パンフレットの主流となっている。観光はよく「おもてなし」という言葉が使われるが、おもてなしは「暖かく旅人をお迎えする」という意味が表面的なことである。上松町の観光パンフレットは、「おもてなしを欠いてしまった観光パンフレット」である。

木曾八景の一つ、「駒ヶ岳の夕照」は、西の山に沈む夕日が、東の山の木曾駒ヶ岳の晩秋から冬、そして春の季節にかけて駒ヶ岳の白い雪に夕日が照り映え、赤く染まる光景である。観

光客の方々に「駒の夕照」の説明をつけることが大切である。

それに17、18ページの麦草岳、木曾前岳の写真の手前に、横巾のある梯子状の木の柵が撮っている。三か所撮っているが、これは木曾特有の形をした稲架（はぎ）で現在では多くが姿を消している。説明がほしかった木曾の民俗文化財である。

それから18ページの「風越山」の個所の説明文の「誤り」について『木曾谷歴史文化研究文庫通信』（第50号）で指摘をしておいたが、「説明文」でない、「詩」でもない文章である。

この文章は上松町のパンフレットの最初のページ（1、2ページ）に「木の国、美林の里。旅心に微笑む ふるさとの路」と、26ポイントの大きな活字で入っている。その背景は、夕日が西の彼方に沈み、木曾駒ヶ岳の山々の稜線の日没が美しく続いている。

この観光パンフレットの最高の美しい写真であるが、前述の説明文でこの美しい木曾駒ヶ岳山系の写真は破壊である。私のこの記述が無茶かどうかは、地元の上松町の人々や、上松中学校の生徒に感想文をかかせて聞いていただきたい。また上松町の町民の方々も、町の公費で作ったこの観光パンフレットの「内容、質の優劣」について考えていただきたいと思う。

私が上松町の観光のブランド化のタイトルでこのレポートを書くにいたった動機は、莫大な公費を使って作成した上松町の観光パンフレットに「投資効果」があるのであろうか。かかる問題からである。

こうして書くことによって、また美しい「おもてなし」のある、ブランド化された「上松町の観光パンフレット」にしてほしいことである。

（2）上松町南部地域の観光資源の見直しと観光ブランドの確立

1 小野の滝 木曾八景 小野の瀑布

中仙（山）道が滝の前を通過していた好条件で早くから知られているが、小野の滝が最初に文献に登場するのが、細川幽斎の1580年代の『老（おい）の木曾越え』である。

貝原益軒は貞享2年（1685）に『岐蘇路の記』で小野の滝を紹介。幕府の旗本飯塚正重は明暦元年（1655）年、小野の滝を「しらきぬをひらけんやうにして、みなぎり落つる滝あり」と書き

山姫のおるしらきぬを秋の陽にさらすかと見る小野の滝つ瀬

と詠んでいる。子規と並ぶ俳句の巨匠高浜虚子は、明治28年5月11日、上松宿に泊り、翌12日小野の滝にさしかかり

小野の瀑を見る

子規鳴き過ぐ雲や瀧の上

（『木曾路の記』）

と詠んでいる。虚子は上松の地で7句を残している。

小野の滝は、北斎、広重の二人の巨匠に描かれている歴史に残る名瀑である。

構図は良く似ており、広重は北斎の「諸国滝めぐり 小野の瀑布」をみて描いたものと思われる。

広重の「小野瀑布」は、「木曾海道上松宿」として描かれている。

2 滑川橋の北と南

滑川が歴史々料にでてくるのは、明暦元年（1655）の『藤波の記』が最初かと思われる。『藤波の記』では

「少行（すこしいき）て、松原といふ所に赤松の大なる有。此松をあげ松といへり
そこを過て橋有。下はふかさ五・六丈（約18M）もやあらん。石川なり。其石皆しろし。」

この描写は、「滑川」であるが、「橋有」、「石川なり」と誌るし、「滑川橋」や、「滑川」という川の名が書かれていない。

大桑村の「伊奈川橋」については、

「山あひを行めぐり伊奈川村。ながき橋あり。此川、伊奈といふ所よりながれ出づという。」

伊奈（伊那）川橋は、滑川と並んで江戸時代中山道の大河であった。ところが、滑川橋という大河でありながら、飯塚正重は、「滑川橋、滑川」の名をいっさい書いていない。

江戸に住む旗本であるため、木曾の川の名を知らないのではなく、地元詳しい案内人をつけての旅で、中仙道に沿った坂の名前や、部落の名をことこまかく誌るしている。

私は明暦元年（1655）年当時、「滑川」という川の名の地名が一般化していなかったのではないかと推察している。

滑川の左側、旧中仙道脇に、「石道の磨崖碑」がある。「磨崖碑」は自然の岩に、「銘」を刻んだ碑のことで、

「石道 文化元甲子年」

とある。「石道」は坂道の土が流れないように「石を埋めた」、道のことである。この「石道」は、木曾教育会の『木曾、歴史と民俗をたずねて』（昭和54年）に

「上松中学校の前を通り、滑川橋に下る。このあたりはかつての中仙道で、最近までわずかながら石畳も残っていた」

と記述されている。この「石道」について私は自費出版『木曾ヒノキの里 上松の歴史散歩』（昭和55年）で紹介をした。しかし江戸時代の中山道の道筋に、当時のままの姿で残っている、文化元年（1805）の「石道の磨崖碑」や、上松中学校へ向かう旧中仙道の「石道」につ

いては、「信州木曾上松：旅する」（上松観光協会）、「中山道木曾路：小さな旅」（木曾観光連盟）、「信州木曾路：中山道を歩く」（木曾観光連盟）の観光パンフレットに記述されていない。

江戸時代後期に西洋の影響で洋画が導入され、洋風画家の代表者司馬江漢が、滑川橋を描いている。この橋はスケッチ様式であるが、左右から川の中央へ巨木を45度の角度で突き出し、中央に板を渡した「はね橋」である。

明治時代の写真に滑川の「はね橋」があるが、江漢の描いたスケッチは貴重である。

滑川橋の東に風越山が望まれ、「風越の晴（青）嵐」はこの場所からみたものである。滑川橋は鉄道開通後も木曾路の景勝地として絵葉書などで紹介されている。ただ短歌、句はいまのところ未見である。

3 上松水力発電所へ向かう吊橋：小野

吊橋は桃介橋に次いで木曾で2番目の規模で、関西電力が上松発電所へ資材運搬用にかけてのものである。橋のすぐ上流に、大正12年完成の、桃山水力発電所の「取水堰堤」と、石積みで塔の形をした珍しい「魚道」がある。この魚道は福沢桃介の意向を受けた観光スポット的な文化財のものである。当時のままの姿で残されている。

堰堤は「巾二百八十二尺（約95M）、高さ十九尺（6M強）」、上流約200Mに滑川が木曾川に流入している。滑川の土石流がこの「取水堰堤」に押し寄せ傷ついた堰堤の修理跡をみることができる。最初は寢覚の床の上流に「取水堰堤」を築く予定であったが、寢覚の床の景観を壊すため現在地に作られたものである。

橋の上流、下流の木曾川は滑川のおびただしい花崗岩が広がり、下流に花崗岩が堆積し広い中島、中州ができ、松などの林が形成されている。この木曾川河中の大きな林は木曾でもここだけで、おびただしい量の滑川の土石流で形成されたものである。

橋の下、木曾川左岸寄りの木曾川に直径10Mを越える花崗岩の巨石がみえる。これだけの巨石を滑川の土石流が運んだものか、それとも氷河期に、氷河が運んだものか専門家の指導を受けたい。

この吊橋は観光資源の知られざる隠れスポットである。歌人、俳人に是非共、一首、一句お詠みいただきたい場所である。

4 北斎の木曾路ノ奥阿彌陀ヶ瀧と隠れ滝

小野瀧の南約0.5キロ。荻原の部落の木曾川の対岸に「隠れ瀧」がある。その名がしめすように、樹々の間に、花崗岩の柱状節理をすべり落ちるように白い瀧がみえる。

北斎の描くこの瀧は、瀧の手前の岩の上に3人の男が、鍋で何かを煮、おそらく酒盛りをしている奇抜な構図で、北斎の作品の中の代表作品の一つである。

右側上部に次の銘がある。

北斎為一筆 木曾路ノ奥
諸国瀧廻り 阿彌陀ヶ瀧

「諸国瀧廻（めぐり）」は、全国の「名瀑」を描いたもので、松本市の浮世絵博物館長の酒井雁高氏によると、現在残っているものは7瀑しかないという。

そのうちの2瀑がこの滝と小野の滝である。この滝については種々推察されているが、この滝が小野の滝に隣接し、かつ萩原部（集）落の木曾駒ヶ岳寄りの山中、東野（とおの）という部落に古刹、「東野の阿弥陀堂」がある。この二つの理由からこの隠れ滝を北斎の「木曾路ノ奥 阿弥陀ヶ瀧」と推察した。次のような歌、句がよまれている。

北斎が描いた木曾の隠れ滝

北斎が木曾で描いた瀧廻（め）ぐり

（林長十 木曾谷歴史文化研究文庫通信 第33号 平成22年）

北斎が阿弥陀の瀧で酒を飲む

北斎の奇想天外阿弥陀の瀧

（松沢正兵衛 木曾谷歴史文化研究文庫通信 第33号）

5 木曾で例がない山の形をした蕎麦粒岳

萩原に木曾駒ヶ岳山系から流れる川、萩原沢の源流部に、山頂の鋭い特色のある山が見える。蕎麦粒（そばつぶ）岳で標高は推定で2330M（信州山岳百科Ⅱ）。一度見たら、山の名を忘れることのできない存在感のある山の姿である。¹⁾

国道からの距離もあり山全体が小さいこともあって上松町南部の町民の方でも山の名を知らぬ方が多い。上松町観光協会の観光パンフレットの16ページに「木曾八景 駒の夕照」の説明で右手、いわゆる南側に小さく撮っているだけである。山名はつけられていない。

19、20ページに木曾山脈の上松町地籍の山と駒ヶ岳登山道、空木岳（2863）²⁾ 登山道などの地形図に、蕎麦粒岳が、独標（2339）、キニバ岩（2120）と一緒に記載されている。

蕎麦粒岳を初めて一般向けに紹介した書籍が、昭和58年信濃毎日新聞社から出版した『信州山岳百科Ⅱ』である。上松郵便局に勤務しておられた野口英作氏の強い推薦と、実際登ったことのある上松町の武居生氏（故人）と、大桑村在住の柳橋正男氏の三人のお話を元に私が最終原稿をまとめた。

その時武居生氏が三角点のなかった蕎麦粒岳を、地図や測量関係者の協力で、標高を2330Mと算出し、山岳雑誌『岳人』（昭和36年2月号）に発表している。

『信州山岳百科Ⅱ』では、上松の観光パンフレットにある「キニバ岩」は紹介をしていない。また、山の名も「蕎麦の実」に似た三角形型から「蕎麦粒岳」とつけられたことを紹介した。

ところが、新聞『木曾日報』の平成2年に、当時の木曾日報記者の松岡隆氏（木曾福島町）が、「非常に峻しい地形の古い言葉に」、「そば立つ」という意味があり、その「そば立つ」が「蕎麦粒岳」の山の名となったことを書かれており、その記事に感動した記憶がある。

武居生氏や柳橋正男氏は、蕎麦粒岳は、木曾山脈本流の稜線から西側へ大きく張り出した「支峰の独立峰」で、木曾山脈と別の山である。と述べられている。ただ信濃毎日新聞社の新海渡男氏は「中央アルプス」の項目として整理されている。

さてこの山をどのようにして観光スポットとして紹介するかが今後の課題である。まず第一は上松町の観光パンフレットを作成している上松町観光連盟と相談。次は上松町の観光写真を毎年募集しているが、その募集のテーマに、「蕎麦粒岳」を選んで撮影をしていただく。

一方、写真が用意できれば関係者と相談していただき、観光パンフレットで紹介をしていただくことが広く知っていただく手段である。

上松町の観光パンフレットには、蕎麦粒岳（2330）を中心に、「独標」（2339）、キニバ岩（2120）の三山が並列している。この三つの山を、どのようにブランド化するかを深く考える必要がある。

例えば

- (1) 木曾駒ヶ岳上松三山（さんざん）
- (2) 上松三座
- (3) 萩原三山
- (4) その他公募で山名を決める

等を提案しておきたい。私は、観光は地元の方々に「愛していただく」ことを第一と考えており、地元の方の十分な話し合いがブランド化にとって大切である。

「蕎麦粒岳」は上松の町民にとって知らない、知られざる山であるが、一度名前をおぼえたと心に残る美しい山である。名山である。観光客の方々に感動をもって、「おもてなし」できる山である。そのためにブランド化は必要である。

6 日本最大のケルンバット

ケルンバット。美しい響きをもった言葉である。上松町の滑川を境いに、上松町、大桑村境いの、J R中央西線のすぐ上、約100Mほどの高い場所に、丸い小山々が続いている。ケルンバットは、同一方向に向かって、ほぼ直線上に並んでいることが特色で、地すべりなどで生じた円形状の小山とははっきり区別される。「ケルンバット」の語源は、アメリカの地質学者、ローソンがカリフォルニアの、「上ケルン盆地」で断層地形を発見。ここの「ケルン」が日本の地質学者辻村太郎氏がケルンバットと和訳したようである。

上松町の観光パンフレット21ページに「ケルンバット」の説明文がある。この文章は、私が、名古屋市市の鈴木克英氏が主宰する雑誌、『森と田圃』（昭和59年5月号）に「木曾上松町のケルンバット地形」として発表したものの引用である。21、22ページの写真に、ケルバット北限の「岡本山」が撮っている。21ページの文章を一部変更して「ケルンバットの山岡本山」と説明を入れるようパンフレット作成者をお願いしたことがある。また、21、22ページにケルンバット列をイラスト的に入れることによって、ケルンバットの位置を観光客に知らせることができる。22ページの「木曾古道」の説明文の写真に、「独標」、「蕎麦粒岳」、「キニバ岩」が小さく撮っている。

観光パンフレットの「木曾・上松 MAP」に、「ケルンバット」の6文字が入っているが、ケルンバット特有の「丸い小山の並列の山」をイラスト風に入れることによって、より深く知っていただくことができる。

珍しい上松町特有のケルンバット地形をより詳しく説明することが「おもてなし」の心の一

つである。

桜散りケルンバットは春霞
倉本のケルンバットの山桜
山桜ケルンバットの山に咲き
(林 長十 長野県)

ケルンバット草山絶えて半世紀いま雑木山面影もなし
草カッパケルンバットの山々で木曾馬の草刈りし日もあり
(林 あさゑ 長野県)

7 桃山水力発電所と桃山の滝

倉本の対岸、木曾川右岸に、白い大正ロマン様式の桃山水力発電所が見える。木曾にある洋風建築のなかで最も美しい建物である。

設計は大同水力の土木技師佐藤四郎。桃介橋の設計も同じ佐藤四郎と推察している。

石川栄次郎の『流れとともに』に、「中央線須原駅から一里程中仙道を上ると、左手に白亜のしょうしゃな建物が見える。桃山発電所である。この桃山の名は前社長福澤桃介氏の名にちなんで命名されたものである。」と書かれている。

そして桃山発電所の下流約200Mの小さな沢で、上松町、大桑村境いとなっている「境沢」がある。この沢に須原発電所へ通水する水が余った時の「余水吐」(よすいはき)で、この余水吐の大量の水を約70M下へ、境沢を利用して落としている。これを「桃山の滝」と命名している。

これは福沢桃介が木曾の観光に役立てるためにわざわざ作った観光スポットである。完成後88年、いまは福沢桃介が木曾に寄せた思いが忘れられている。

また、境沢の両岸に木が茂り、桃山の滝の真白な水が落ちる美しさが失われている。木曾路の観光スポットの復元、新しい観光資源のブランド化のために、上松町、大桑村、また木曾観光連盟が関西電力へお願いしてほしい。

「桃山の滝」については、上松町、大桑村、木曾観光連盟の観光パンフレットに紹介されていない。

桃山水力発電所は、大桑村の野尻発電所、須原発電所、福沢桃介が作ったこの発電所が、経済産業省の「産業遺産」に指定されているが、上松町は推薦を断った経緯がある。「桃山の滝」なども全国でもあまり例のない構造である。「産業遺産」の申請をしてほしい。

上松町南部の観光スポット、観光ブランドの確立も合わせて町や地域へお願いしたい。

8 歴史のみち 自然のみち「街(かい)道楽」に紹介されている上松町の近代化遺産

平成22年8月に発行された、「街道楽(かいどうらく)」という観光パンフレットは、「木曾、下伊那、中津川地域交流協議会」が刊行したもので、岐阜県中津川市長大山耕二氏の強い意向で刊行されたとお聞きしている。しかし上松町の紹介は不十分である。

上松町もこの協議会に参加している。この観光パンフレットに、「近代化遺産のみち」という項目が設けられているのが特色である。

近代化遺産は、文化庁が50年以上経過した遺産を対象としている。上松町には次の近代化遺産がある。

1) 鬼淵（おおにぶち）鉄橋 大正3年（1913）完成

木曾の山は明治22年、皇室の所有林となり、「御料林」と呼ばれ、管理は、「帝室林野局」が管理。帝室林野局は、木曾の御料林から木曾ヒノキを、「森林鉄道」で搬出している。

「鬼淵鉄橋」は、大正2年12月、帝室林野局土木技師、三根奇能夫が設計。九州の八幡製鉄で精錬した鋼鉄で、大阪の横河橋梁製作所が作った、日本の国産第一号のトラス鉄橋である。

三根奇能夫は長崎県出身。熊本の第五高等学校で、夏目漱石に英語の授業を受ける。鬼淵鉄橋は次の認定を受けている。

- ・通産産業省の産業遺産の認定
- ・信濃の橋百選（長野県の名橋100選）

2) 小田野（おだの）鉄橋 大正3年完成

小田野鉄橋は、木曾森林鉄道小川線。赤沢自然休養林へ向かう路線の小川（西小川）にかかっている。設計、施工は鬼淵鉄橋と同じであるが、鋼鉄はイギリス製。小田野鉄橋からの木曾駒ヶ岳の麦草岳、牙岩、木曾前岳の風景は絶景で灰沢鉱泉も近い。

このほか上松駅近くの十王沢に、大正年代の年号と、森林鉄道の鉄橋をかけた、大阪の「横川橋梁株式会社」の銘板が残っている。

またJR東海の中央西線上松駅は、昭和25年の上松町の大火で明治時代の駅の庁舎が焼失。その後鉄筋コンクリートの中央西線の駅の庁舎では戦後初の建物である。戦後の20年代の近代化遺産である。これらも上松町における観光ブランドである。

3) 日本最初の木造車道橋「木のかけはし」平成8年

「木のかけはし」は、「間伐材」の活用対策で長野県林務部が、カラマツやスギ、ひのきなどを集成材に加工し架けた橋梁史に残る橋である。

「橋」は、川にかかるものであるが、この橋は、木曾森林鉄道小川線の、廃線跡を「掘割り」、その上にかけてのもので、間伐材消費のために、わざわざ「橋」をかけたものであろうか。

私は上松町役場へ、観光的要素の対象物としての価値のきわめて高い「木のかけはし」を紹介して下さるようお願いした。紹介はしてくれたが、「木のかけはし」とかいてあるだけで、観光客には何のことかわからない。「日本最初の木造車道橋」という形容詞を入れることによって、「観光スポット」として広く知られることとなる。

平成21年、木曾観光連盟が、『信州木曾路：中山道を歩く』という、歩く旅のガイドブックを刊行した。この中に「木のかけはし」も、「鬼淵鉄橋」も紹介されていない。町の観光担当者からの要請がなかったのである。

平成24年度に、新しい改訂版に、「信濃の橋百選」に、この二つの橋が選定されているので、紹介していただくようお願いをしているところである。多くの人に知っていただく。これが「観光ブランド」である。

4) 寢覚水力発電所 上松町島

昭和13年9月に発電を開始した当時の国策会社「日本発送電」のこの水力発電所は出力、3万5000KW、木曾川上流の木曾町福島の木曾合同庁舎裏にある「塩淵堰堤」で取水し、福島の手敷野で木曾川を鉄橋をかけて木曾川左岸へ渡し、あとは地下トンネルで送水をしている。

工事の開始は、福沢桃介の大同電力であったが、十五年戦争中多くの水力発電所と強制合併させられて出来た「日本発送電」の時完成をみている。

福沢桃介は、木曾に作った水力発電所の建物も「大正ロマン様式」の美しいデザインとしているが、この「寝覚水力発電所」には建物の様式は簡略化されている。しかし上松町の近代化遺産として評価できる歴史を持っている。落差は64M。

5) 上松水力発電所 上松町小野ヶ谷

小野の滝の木曾川の対岸にある「上松水力発電所」は、十五年戦争末期の太平洋戦争中に、日本発送電が工事を始め、戦後の昭和22年完成。寝覚水力発電所の水を利用し地下トンネルで送水。出力8000KW。

上松水力発電所の建設工事は、大倉土木。大正8年に木曾で初めて水力発電を開始した旧山口村の賤母水力発電所の工事も大倉土木である。

大倉土木は戦後の大成建設である。『大成建設社史』によると、戦中、戦後のモノ不足の時代で、大日本発送電からの工事費遅配の苦しい歴史が誌るされている。

寝覚水力発電所には日本統治下の朝鮮人。上松水力発電所には、朝鮮人と、強制連行された中国人捕虜が建設工事に従事している。

この外地元の旧制木曾中学校の生徒も、「勤労勤員」として工事に参加している。

なお上松水力発電所脇に、下流の須原水力発電所の取水堰があり、タワー式の石積の美しい「魚道」が作られている。福沢桃介の木曾谷の水力発電所に美しいデザインを取入れた理念をみることができる。

6) 桃山水力発電所 上松町倉本登玉

上松町倉本の木曾川右岸の登玉地籍にあるこの発電所は本来ならば、野尻、須原などの地籍名をつけ、倉本水力発電所とするところを、桃介の「桃」の一字を取って「桃山水力発電所」としている。工事用の吊橋も「桃山橋」と命名。大正12年完成の発電所の建物は、木曾に残る桃介が作った幾つかの水力発電所のなかで、一番美しいデザインの建物である。

デザインは大同電力の技師佐藤四郎氏。桃山発電所の特色は、関西方面へ送電する「60サイクル」と、関東方面へ送電する「50サイクル」の両方の「周波数変換機」2台が設置されている。大正13年に作られたもので、日本初の試みである。

発電所の鉄筋コンクリートの建物は、上松町最古。近代化遺産など何の指定も受けていない。出力1万800KW。

7) 桃山の滝

桃山水力発電所の下流200Mに、「桃山の滝」がある。これは発電所の、「送水路」として下流に流し、送水路をオーバーフローした時、境沢を通して、二百尺（約60M余）下の木曾川へ人工の滝として落とすものである。

福沢桃介が木曾の観光のために、自然の滝に見られない大量の水を落として作ったものである。『木曾とおきコレクション』には、「桃山発電所、桃の滝」の二ヶ所の観光スポットと

して紹介され、いずれも「桃の滝」として紹介されている。しかし桃介の元で木曾川水力の開発にあたってきた、石川栄次郎の『流れとともに』には、「桃山ノ瀧」としているのが訂正をしておきたい。

9 観光パンフレット『街道楽』に紹介されていない上松町の近代化遺産

以上7カ所の上松町の近代化遺産について紹介してきたが、これらの遺産はすべて紹介されていない。

特に4の「寢覚水力発電所」と、5の「上松水力発電所」の2ヶ所は、私自身も、また他の文献でも発表されていないため、紹介しない点は肯定できる。

しかし、他の5ヶ所については、新聞に発表されたり、木曾広域連合地域振興課が平成22年に刊行した、木曾の多岐にわたる観光地点を公募によって『木曾とっておきコレクション』という百科辞典的にまとめたもので、行政関係の職員、まして観光担当者職員は必読の書である。

なかでも、「鬼淵鉄橋」は、上松町の建造物の中で、上松町の教育委員会が本気になって申請をすれば、国の重要文化財に指定されるべきものである。これだけの近代化遺産を紹介しなかったことはどのような理由によるものであろうか。

10 近代化遺産の地域ブランド化の試み

岐阜県中津川市が中心となって発行した『街道楽』は、「近代化遺産のみち」を新しくテーマに選んだことは大きな特色である。長野県でも前例のない観光パンフレットである。

このテーマは、中津川市長大山耕二氏の強い御意向で設定されたと中津川市の観光担当者が23年春に電話で話された。その後平成23年10月12日、中津川市の観光担当者を訪ね、上松町の近代化遺産や南木曾町の太平街道の80年間も続く木曾で唯一の「木曾見茶屋」が、『街道楽』に紹介されていないことを話し、次回の『街道楽』に入れて下さることをお願いした。

中津川市の観光担当者にとって、木曾の代表的な観光ブランドが紹介されていないことの責任は、上松町や南木曾町の観光担当者の責任であることはここで触れるまでもない。

しかし中津川市が一番多くの負担金を支出しているものと思われる。したがって木曾の重要な観光ブランドが入っていないことは、中津川市民が木曾を訪れ、見落すことになる。また、中津川市の公費の支出の投資効果が不十分で、結局中津川市の市民の税金の損失である。

「観光パンフレット」の「地域ブランド」の確立が今後の重要な課題であることを指摘したい。

[注]

- 1) 『美しき雲上の山旅 中央アルプス』に、蕎麦粒岳の山名は記述されていない。独標の山名のみである。
- 2) 『信州木曾上松 旅する』で、空木岳の標高を(2764M)と、誤って表記されている。正しくは(2863M)である。